■本書の特徴と活用について

本書のタイトルとなった「交通・安全学」とは、交通社会を取り巻く諸問題を広く捉えるとともに、交通安全を支えている技術体系や社会システムについて、さまざまな専門家の英知を取りまとめたものである。

理論編は全11章から構成され、各専門家が次世代の交通社会を学ぶ上で不可欠と考えるキーワードを節として独立させ、解説を加えている。そのため、必ずしも章初めから読み始める必要はなく、章や節をまたいで読んでも理解できるようになっている。あえて本書の流れを執筆者とともに概説すると、

1章から2章までは、都市工学の専門家が都市と交通のあり方に言及しつつ、これからの交通社会を構築する上で必要な知識を解説している。続いて3章では、環境学の専門家が、環境問題と交通の関係を概説し、生態系を考えた低炭素な社会に向けての知見を示している。

4章からは交通に焦点を当てて、交通渋滞の特徴やその解決方法について、交通工学の専門家が説明している。5章では交通技術の進歩として、高度交通システムに着目し、その歴史や展開について情報・システム工学の専門家が解説し、6章、7章で機械工学の専門家が、交通事故の実態を俯瞰しつつ、車両の安全技術について説明している。8章、9章では医学、心理学の専門家によって、ドライバー心理や交通行動が解説され、事故が起きた場合の医療体制や事故を未然に防ぐ対策等が示されている。

10章、11章は交通を取り巻く社会システム全体の問題について言及している。10章は法学の専門家によって、交通安全に関する法体系や刑事規制、リスク管理等が紹介されている。また、11章では経済学の専門家が、均衡成長と不均衡成長あるいは規制と規制緩和等対立概念を示しつつ、持続的成長について言及している。最後に、レジリエントな交通社会と題して、さまざまな災害や社会環境変化に耐え得るとともに回復力の強い交通社会のあり方を提示した。

また、理論編の各章の末尾において、章の内容に関連した学会の取り組み（プロジェクト）を示している。理論編を読まれた方は、実践編と併せて学んでいただくことで、理論が即地的問題にどのように対処するかを理解できる。

なお、本書はそれぞれの分野内の専門的知見を網羅的に示しているわけではない。むしろ、各分野を横断的に示すことで、読者には複眼的な視点で「交通・安全学」を修得していただくことを意図している。本書は国際交通安全学会の特徴である「学際性」を強く意識した書物であり、読者が各章、各節を自由に読み解くことで、その相互間に埋もれている新たな知見を発見していただけると幸いである。